

佳作賞

「イービス艦が  
やって来る」

『あべの文学』10号

森口 透氏

森口 透（もりぐち・とおる）

一九四二年、中国の青島生まれ、兵庫県朝来市育ち。京都大学工学部（大学院）卒業後、一九六七年から三〇年間、神戸製鋼所勤務の後、一九九七年から二〇〇七年まで、大阪の米国領事館に勤務。一九九九年四月から五年間、大阪文学学校に学び、小説とエッセーを書き始め、今までに「樹林」と「あべの文学」に九編の小説と三編のエッセーを発表。現在、A文学批評会（大阪市阿倍野区）会員。二〇〇四年の発刊以来、同人誌「あべの文学」の事務を担当。大阪文学学校関係の賞を除き、文学関係の受賞は今回が初めて。

「イービス艦がやって来る」

二〇〇X年の八月初旬のある日、Q市の米国総領事館に勤める池永は、八月三〇日から四日間の予定でQ港に米海軍のイービス駆逐艦（イービス艦）が寄港することを知らされる。上司であるマクミラン総領事は、この寄港では、抗議デモへの参加者数より多い歓迎者を集めて、盛大にイービス艦の歓迎式を開催するように池永に指示した。今までの米艦船の寄港では、概ね歓迎者が一〇〇人で抗議デモ参加者は四〇〇人である。

池永は、総領事の指示を遂行するための計画を立てた。まず、海上自衛隊の協力を得て二〇〇人以上を集め、今回が初めての試みだが、Q市内の商店街の協力を得て、二〇〇人以上を集めることにした。そのため、池永は暑い中を市内の十二か所の商店街の商店会長を訪問して、彼らと誠実に交渉した。その結果、商店街からも二〇〇人以上が参加してくれることになり、いつも協力してくれる日米協会や商工会議所、地方政治家、幼稚園児らを含めると五〇〇人以上の歓迎者を集められるという目処が立った。

一方、池永の三男は二五歳になるのに定職につかず、フリーター状態であり、池永夫妻の悩みの種となっていた。今も、プロのミュージシャンを目指し、東京に行って一人である。寄港が突如中止されたことを告げられる。寄港中止の本当の理由はイービス艦の機械的な問題だった。だが、これは公表できないので、台風の影響が強く残っていることを寄港中止の理由にした。また、もう歓迎式に参加する五百人以上の人々に連絡する方法がない。池永は朝早くイービス艦が着くことになっていた岸壁に向かう。

早めに岸壁に着いたが、岸壁には歓迎者、抗議者とも数が次第に増えてきた。池永は担当領事と相談し、海上自衛隊、Q市港湾局の協力を得て、マイクを使って群衆に寄港が中止されたことを告げる。参加者の中にはあからさまに怒りを示す人々がいて、一時は大きく混乱したが、それも終息に向かい、集まった人々は帰って行った。

池永は、担当の領事らとともに急いで総領事館に帰り、緊急の事後処理をした。このとき、池永は何百人もの人々に大きな迷惑をかけたことを非常に申し訳なく思うと同時に、一カ月近くの努力が無駄になったので、大きな徒労感を感じた。そして、人は結局、自分の意思でなく、大きな流れに流されて行動しているだけだ、と思うのだった。

寄港の世話で頭が及ばなかったが、帰宅した池永は、三男が音楽修業をしている友人を訪ねて東京に行ったことを、妻から知らされる。三男が帰ったら、フリーター状態を脱し、早くきちんとした就職ができるために、もつと親身になってやろうと、考えていた。

生活したいと言うので、池永は悩む。

孟蘭盆会には日帰りで故郷の父の墓参をした。そして、八年前に商社勤務を辞めて米国総領事館勤務を始めた時、父から、長い間世話になった会社を辞めて外国政府のために働くことに対し非難めいたことを言われたことを思い出した。そして、商社時代の自分と比べて、今の仕事の不自由さ、黒衣としての屈託を思うのだった。

盆が終ると、三つの団体から総領事館に抗議書を持って行くので、池永に会ってくれるようにとの依頼が来た。池永は、総領事、総事と相談し、会うことになったが、二人から、日本人職員は一切の議論をしてはいけないと、あらためて釘をさされる。一部の抗議者から心ないもの言いでの侮辱を受けたりするが、立场上、池永は反論ができない。ある日の帰路、抗議者の一人である、核兵器禁止協議会の柳沢と町で出会い、コーヒーを飲みながら、一時間足らず話をする。核兵器反対への柳沢の情熱を理解し、それに賛同しつつも、池永は国の防衛や核兵器の抑止力、日本の非核三原則の持つ矛盾などについて考えをめぐらす。

八月三〇日朝の寄港の日が近づいてくるに従って、台風が日本に近づいてきた。そのため、寄港は大丈夫か心配したが、二九日の夜八時には台風は最悪の進路を避けたので寄港ができることを確認して、その夜、池永は眠りに就く。しかし、翌朝の午前三時半に領事からの電話で起こされ、